DARKNESS FURTHER THAN NIGHT

KENZO KITAKATA

夜より遠い闇

北方謙三

Kenzo Kitakata

小説

濡れた髪から、こめかみにひと条、水が流れ落ちてきた。
汗を拭うように、洋一はそれをジャンパーの袖で擦った。霧雨の中に、『ユキ』というグリーンのネオンがぼんやり見えている。
駅から十分は歩いた。大した雨ではないと思ったが、下着まで湿りはじめているようだ。駅前のタクシーが喜んで行きたがる距離ではなかった。
なんでもない扉だった。ただ押せばいいようになっている。両隣りと地下にも店があって、そちらの方がいくらか派手なようだ。
ドアを押した。低いBGM。男と女の話し声。カウンターの上の照明が、端のスツールの男の背中を、やけに明るく照らし出している。いらっしゃいませ。ボックスから立ちあがった女が、商売物の笑みを浮かべながら高い声で言う。

狭い店だった。カウンターに六人。丸くなったボックスに六、七人。入れる客はその程度のものだろう。
洋一は、カウンターの真中に腰を降ろした。
「ビール」
女が出したおしぼりを受け取りながら、カウンターの中のバーテンに言った。
洋一にちょっと眼をくれただけで、バーテンは黙ってコースターとグラスを出した。ビール瓶を一度ダスターで拭い、音をたてて栓を抜く。
一杯目を、洋一は黙って飲み干した。二杯目を注ぎながら、女は洋一の前にメニューを置いた。洋一は首を振った。一杯目のビールも、飲むつもりはなかった。女が、妙に開心をなくしたように、ボックス席の客のところへ戻った。

「知ってるはずだよな」
なにも言わず、バーテンは空のグラスの方へ眼をやった。レモンスライスが、グラスの底へばりついている。
「知ってたら？」
バーテンがグラスに手を伸ばした。
「自分の胸に手を当ててみろよ」
洋一は、手早くジン・トニックを作るバーテンの手もとを見ていた。よしゃいいのに。背から女の声が聞えた。ボックスの客が、なにかブツブツと言い返している。
ジン・トニックを置き、バーテンは顔をあげてにやりと笑った。三十五、六。赤いベスト

長編

ポータイも、あまり似合ってはいない。ダークスーツの似合いそうな男だ。いくらか後退した額、笑うと深くなる眼尻の皺。白い肌に、髭の剃跡が青々としていた。
「知ってるよ。なにしろ、きのうまでうちにいた女だから」
「じゃ、話は早いな。俺は、あんたが白を切るんじゃないかと思ってた」
「失踪でもしたのかね？」
「そこんとこじゃ、白を切るってわけか」
「別に」
バーテンがグラスを磨きはじめた。洋一は煙草をくわえた。差し出された洋一の[illegible]ク入りの灰皿は、きれいに水が拭き取ってあった。
「くだらねえことで、つべこべいう気はない。ただね、扱いようってのはあるんじゃねえか、思ってさ」
「女の子を、どう扱えっていうんだね？」
バーテンはグラスを磨き続けている。せいぜい十万。それくらい取れればいいのか、洋一は思った。三割が洋一の取り分になる。雨の中を歩いてきたことを考えれば、[illegible]いのか。どうせくわえこむなら、もっとましな玉にしろと麻子には言った方がよ[illegible]
「あの女、結構愉しんでたぜ」
「だからって、口を拭って済むと思ってるわけじゃねえだろう？」

光文社文庫

長編小説
夜より遠い闇
著者　北方謙三

2000年4月20日　初版1刷発行

発行者　濱井　武
印刷　慶昌堂印刷
製本　榎本製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話　(03)5395-8149　編集部
8113　販売部
8125　業務部
振替　00160-3-115347

© Kenzō Kitakata 2000
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-72986-X　Printed in Japan

R本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

長編小説

夜より遠い闇

北方謙三（きたかたけんぞう）

光　文　社

目次

第一章 5
第二章 61
第三章 131
第四章 172
第五章 217
第六章 265
解説 末國善己（すえくによしみ） 304

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

1

濡れた髪から、こめかみにひと条、水が流れ落ちてきた。

汗を拭うように、洋一はそれをジャンパーの袖で擦った。霧雨の中に、『ユキ』というグリーンのネオンがぼんやり見えている。

駅から十分は歩いた。大した雨ではないと思ったが、下着まで湿りはじめているようだ。駅前のタクシーが喜んで行きたがる距離ではなかった。

なんでもない扉だった。ただ押せばいいようになっている。両隣りと地下にも店があって、そちらの方がいくらか派手なようだ。

ドアを押した。低いＢＧＭ。男と女の話し声。カウンターの上の照明が、端のスツールの男の背中を、やけに明るく照らし出している。いらっしゃいませ。ボックスから立ちあがった女

が、商売物の笑みを浮かべながら高い声で言う。
狭い店だった。カウンターに六人。丸くなったボックスに六、七人。入れる客はその程度のものだろう。
洋一は、カウンターの真中に腰を降ろした。
「ビール」
女が出したおしぼりを受け取りながら、カウンターの中のバーテンに言った。
洋一にちょっと眼をくれただけで、バーテンは黙ってコースターとグラスを出した。ビール瓶を一度ダスターで拭い、音をたてて栓を抜く。
一杯目を、洋一は黙って飲み干した。二杯目を注ぎながら、女は洋一の前にメニューを置いた。洋一は首を振った。二杯目のビールも、飲むつもりはなかった。女が、急に関心をなくしたように、ボックス席の客のところに戻った。
濡れた服は、いつまでも乾きそうもなかった。髪の中からまた水が流れ落ちてくる。
「麻子って女、知ってるだろう？」
バーテンに言った。カウンターの端の客が、空のグラスを指で弾いた。端といっても、洋一とはスツールをひとつ隔てているだけだ。
「知ってるはずだよな」
なにも言わず、バーテンは空のグラスの方へ眼をやった。レモンスライスが、グラスの底に

へばりついている。
「知ってたら？」
バーテンがグラスに手を伸ばした。
「自分の胸に手を当ててみろよ」
洋一は、手早くジン・トニックを作るバーテンの手もとを見ていた。よしゃいいのに。背後から女の声が聞えた。ボックスの客が、なにかブツブツと言い返している。
ジン・トニックを置き、バーテンは顔をあげてにやりと笑った。三十五、六。赤いベストもボータイも、あまり似合ってはいない。ダークスーツの似合いそうな男だ。いくらか後退した額、笑うと深くなる眼尻の皺。白い肌に、髭の剃跡が青々としていた。
「知ってるよ。なにしろ、きのうまでうちにいた女だから」
「じゃ、話は早いな。俺は、あんたが白を切るんじゃないかと思ってた」
「失踪でもしたのかね？」
「そこんとこじゃ、白を切るってわけか」
「別に」
バーテンがグラスを磨きはじめた。洋一は煙草をくわえた。差し出された洋酒メーカーのマーク入りの灰皿は、きれいに水が拭き取ってあった。
「くだらねえことで、つべこべいう気はない。ただね、扱いようってのはあるんじゃないかと

思ってさ」
「女の子を、どう扱えっていうんだね？」
バーテンはグラスを磨き続けている。せいぜい十万。それくらい取れればいい方だろう、と洋一は思った。三割が洋一の取り分になる。雨の中を歩いてきたことを考えれば、高いのか安いのか。どうせくわえこむなら、もっとましな玉にしろと麻子には言った方がよさそうだ。
「あの女、結構愉しんでたぜ」
「だからって、口を拭って済むと思ってるわけじゃねえだろう？」
「じゃ、御馳走さまとでも伝えといてくれ」
「開き直ってるね」
洋一が笑うと、バーテンも笑い返した。煙草を消す。
「やめときな」
バーテンの声が低くなった。ビールに伸ばしかけた手を、洋一は途中で止めた。無駄足か、そう思った。腹いせに二、三発食らわして終りということになるかもしれない。
「それ飲んで、大人しく帰るんだね」
「子供の使いじゃねえよ」
「どうすりゃ、帰ってくれる？」
「俺が考えることじゃねえな。あんたの気持次第ってやつさ」

「薄汚ない、ダニだ」
呟くように、バーテンが言った。それが洋一にははっきりと聞き取れた。腹の中が、かっと熱くなった。
「恐喝にならない言い方ってやつを、ちゃんと心得てる」
「外に、出て貰えねえかな」
怒りを抑えこんで、洋一は言った。バーテンが、またにやりと笑った。
「外に出ろよ」
カウンターの端の男が、グラスを振って氷をカチカチと鳴らした。
「千五百円。ここの勘定は払って貰えるだろうね」
洋一は、ポケットから金を掴み出し、千円札と百円玉を五つカウンターに置いた。
さきに立ちあがる。ドアを開けた時、どうも、という女の声が追ってきた。
相変らず霧雨だった。隣りの店に、男が二人駈けこんでいく。ドアが開いている間、騒々しい音楽が聴えていた。
「めずらしいな」
バーテンが出てきて言った。
「なにが？」
「腕に覚えがあるってやつか。金を取れないとわかれば、大人しく引き退がるのがプロっても

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んなんだがね」
「俺が、なんのプロだってんだい？」
バーテンが歩きはじめたので、洋一も肩を並べた。意外に大きな男だった。背丈は洋一より五、六センチ低そうだが、躰つきはがっしりしている。
すぐに線路にぶつかった。小さな踏切がある。バーテンは、その踏切の真中で立ち止まった。
「こっちだ」
枕木の上を、バーテンは歩きはじめた。馴れている。街中で人のいない場所がどこだか、よく心得ている。
足場が悪かった。枕木をはずすと砂利で、横に動こうとすればレールに足をとられそうだ。明りはほとんどない。
「ここでいいか」
バーテンが振り返った。洋一は、とっさに身構えていた。
「終電までに、まだ三十分ばかりある。あと二、三本は電車が来るはずだ」
「どういうことだ？」
「ぶっ倒れた方は、自殺ってことになるかな。怕かったら、いまのうちにやめといた方がいいぞ」
「はったりかますんじゃねえや」

「電車が来るってのは、はったりじゃない。心中なんてごめんだからな。早いとこはじめるか」

バーテンが言い終る前に、洋一は枕木を蹴っていた。肘を打ちつける。かわされた。どういうふうにかわされたのか、よくわからなかった。バーテンと洋一の位置が入れ替っている。

レールが、かすかに震動をはじめた。電車。近づいてくる。バーテンは動かなかった。表情もよく見えない。待った。さきに電車を避けようとは思わなかった。

近づいてきた。見る間に、ライトが大きくなった。どういう気だ。思ったのは一瞬だった。ライトの光の中で、くっきりと影だけになったバーテンは、それでもまったく動かずに立っている。足もとのレールと枕木がライトに照らし出される。続けざまに警笛が鳴った。急ブレーキの音。耐えられなかった。覆い被さってくる光の輪から、洋一は飛び出していた。線路の柵に、したたかに肩をぶつけた。すごい震動が来た。眼を閉じた。ブレーキの音が耳を打ち続ける。かなり行き過ぎて、電車は停ったようだ。眼を開けた。闇の中に、赤い色が浮きあがって見えた。ベスト。すぐそばだった。

「ここは、逃げた方がよさそうだな、お互い」

バーテンの声は落ち着いていた。柵を登り、有刺鉄線に足をかけるようにして、バーテンは身軽に柵のむこう側に飛び降りた。洋一も続いた。

路地へ駈けこむ。無意識に、バーテンの後ろを走っていた。いくつか角を曲がると、バーテ

ンは歩きはじめた。ボータイを解いてベストのポケットに突っこみ、赤いベストも脱いだ。
「電車、もう行ったかな」
バーテンが洋一の方をふりむく。雨ではなく、汗で躰が濡れているのを洋一は感じた。
「そこの通りに出ると、すぐうちの店だ」
「飲み直せってんじゃあるまいな？」
「通りに出れば人が多い。それを教えてやっただけさ」
「なんで、線路なんかに俺を引っ張りこんだんだ？」
「度胸試しってのは、面白いもんだ。なかなか、いい度胸をしてたぜ」
「こんなことで、俺がビビるなんて考えるなよ」
「まだやりたきゃ、どこからでもかかってきな」
バーテンが、煙草をくわえてジッポで火をつけた。顔が、一瞬赤く照らし出される。
洋一は踏み出した。ほんとうの勝負はこれからだ。バーテンは、煙草をくわえたままだった。一歩詰めるごとに、浅く息をした。無謀に突っこめば、また躰をかわされる。間合い。そう思った。バーテンは、まだ煙草を口から離さなかった。左、右。かわされることは予測していた。バーテンの躰が沈みこんだ瞬間、思いきり蹴りあげた。躰が宙に浮いた。それから路面に落ちる。軸脚を払われたのだということが、しばらくわからなかった。
闇の中で、赤い火がチリチリと燃えていた。煙。霧雨に入り混じって、すぐに見えなくなる。

「立ちな」

バーテンの声は低かった。洋一は躰を起こした。まるで子供だ。頭に血が昇った。突っこみそうになる躰を、唇を嚙みしめることでかろうじて抑えた。見られている。躰の動きのほんの小さなひとつまで、落ち着いて見られている。息を吸った。踏み出す。左。すぐにステップバックした。バーテンの足が一瞬動きかけたのを、洋一は見逃さなかった。また左。退がる。同じ動きを、何度もくりかえした。左の拳は、ただ闇を切っているだけだ。踏み出した。左。さらに踏み出しながら、足を飛ばした。靴が、バーテンの下腹にめりこんでいく。同時に、顎に一発食らった。倒れはしなかった。膝が折れそうになっただけだ。バーテンは、崩れかかった姿勢のまま、さらに拳を突き出してきた。足を飛ばす。顎に衝撃がきて、洋一は尻から路面に落ちた。バーテンも倒れたようだ。

立ちあがった。しばらく、睨み合う。むこうから、踏みこんできた。第一歩が、ちょっと遅れたような気がした。退がれ。頭ではそう思いながら、躰は前に出ていた。

ずしり、と腹にきた。返したパンチが、バーテンのどこを打ったのかはわからなかった。胸ぐらを摑まれ、躰ごとブロック塀に押しつけられていた。顔にかかったバーテンの息をふり払うように、洋一は肘を飛ばした。腰が浮いていた。下から突きあげてくるパンチを、まともに顎に食らった。

どうなったのか、よくわからなかった。塀に背中を凭せて尻餅をついている。そういう自分

の恰好がわかったのは、しばらくしてからだ。
「やるじゃないか、坊や」
バーテンの声ではなかった。カウンターの端で飲んでいた客。多分、間違いないだろう。声の方を見ようとしたが、首が動かなかった。
「なかなかのもんだ。度胸もいい」
バーテンの声だった。手が伸びてきて、ジャンパーのポケットを探った。その時はじめて、洋一はカウンターの端にいた客の顔を見た。
「麻子ってのは？」
客が言った。起きあがろうとしたが、躰は動かなかった。
「尻の軽い、つまらん娘だ」
「それを抱いたんだろう、おまえ？」
「はずみだな。誘い方は下手じゃなかったような気がする。こんな坊やがついてるなんて、まったく思えなかったがな」
「俺は、この坊やの意地の張り方が、なんとなく面白かったな。金だけじゃない。そんな感じだったぜ」
「しかし、久しぶりだ」
「悪かないだろう。二、三発食らったみたいじゃないか」

「結構、ごついのを貰ったよ」
声だけだった。洋一は、眼を開けているのがつらくなった。
「大丈夫か、こいつ？」
「ちょっとこたえただろうが、すぐに元気になるさ。俺もこれくらいの歳の時はそうだった」
「行こうか」
足音。遠ざかっていく。待てよ。言おうとしたが、声にならなかった。
どれくらいの時間、眼を閉じていたのかわからなかった。電車の走る音で、洋一は眼を開いた。いつの間にか、霧雨はやんだようだ。のろのろと躰を起こした。ちょっと頭がくらりとした。それだけだった。
ジャンパーのポケットを探る。金はあった。免許証もあった。なにか抜かれたと思ったのは、夢だったのか。
通りの方へ歩いた。すぐに、空車の表示を出したタクシーが近づいてきた。

2

機材を、車のトランクに積みこんだ。
大した量があるわけではない。ビデオカメラとライトと脚立。それだけあれば充分だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com